

中村哲

日本の医師および人道主義者。1946年9月15日、日本の福岡生まれ。

2019年12月4日、アフガニスタンのジャララバードで銃撃され死亡。

73歳。

中村哲は、自分でできる限りのことを為そうとした。日本で、神経学の研修を受けたが、パキスタン北部での人道的活動のために、そのキャリアを捨てた。自分の患者の多くが隣接するアフガニスタンからの難民であることに気づいたことで、彼は仕事の範囲を隣国に拡大した。さらに、その人々に、きれいな水を与えることができるなら、より多数の人々を助けることができると気づいたとき、彼は医学からも離れた。最終的に、彼がアフガニスタンの東部に運河を建設したことで、ほぼ100万人が助かった。「彼のやり方は、最も重要なことに焦点を当てることだった」と、中村を支援してきたペシャワール会をはじめ、Peace Japan Medical Serviceの当初の支援者の一人で、九州大学副学長渡辺耕一郎は云う。

「彼の心は患者や、地元の人々や、貧しい人々にとって何が最も重要か、にあった。彼は、自分のことなど何も考えていなかった。」

中村は、1973年、九州大学医学部を卒業した。その5年後、珍しい蝶を見たい思いもあって、アフガニスタンを初めて訪問した。が、滞在中に経験した圧倒されるばかりの医療ニーズがゆえに、その地に戻ることになったのだ。1984年、中村は、日本キリスト教海外医療協会から、ハンセン病患者と、ソビエトアフガニスタン戦争が続いていたアフガニスタンからの難民を支援するためにパキスタンのペシャワールの病院に派遣された。

1983年、渡辺は、中村が仕事を広げるための支援者を日本で探していた時に会った。渡辺は、中村の使命に感動した若者グループの中の一人だった。中村を支援するために、彼らはペシャワール会を創立し、募金活動と他の支援者を求めた。1980年代後半、渡辺はペシャワールを訪問し、中村が行っているハンセン病患者支援を直接目にした。大きな問題の1つは、患者の多くは裸足だが、(痛覚が消失するために)足に怪我をしても痛みを感じないことだった。中村は、足の裏の傷を防ぐためのサンダル作りを試みていた。「もちろん、彼は手術も沢山したし、いっぱい他のこともした。が、彼は、どんな種類のサンダルが一番患者に都合がよいのか、それに焦点を当てて、自分の時間を活用していた」と渡辺はいう。

1980年代後半、ペシャワールのUNICEF事務所に勤務していた喜多悦子も、現地で中村と会った一人だ。現在、東京の笹川保健財団会長である喜多は、中村が患者の多くがアフガニスタン難民であることから、個人的なリスクがあっても、二つの国のために働くことは大きな影響を及ぼすだろうと、中村が考えたという。

「中村も、妻の尚子も、日本の安全な町で働くことも、パキスタンやアフガニスタンの紛争地域という危険なところで働くことも、大きな違いはなかったのだろう、彼らにはどんなことが起こっても、彼らは最大限できることをやりたかったのでしょう」と喜多は云う。2001年、タリバンのアフガニスタン支配を断念させるためにアメリカが空爆を開始した後、他の大概の支援グループが現地から撤退したが、PMSは、最終的にアフガニスタンとパキスタンの10診療所を稼働し続けた。しかし、その当時、すでにPMSの重点は変化しはじめていた。2000年に、東部アフガニスタンに未曾有の干ばつが生じたとき、中村は、人々がきれいな水を手に入れる重要性を認識していた。「彼は、結核とハンセン病の患者を診ていたが、貧困状態にあり、食糧を必要としている多くの人々」がいることも認識していた、と九州大学学長で、中村の医学部同級生の久保千春は云う。「飢えは医療では治せない。それが、中村が灌漑に向かった理由だ。」彼の努力で、ナンガルハール州とクナール州のマーワリード運河が出来た。前の仕事では、毎日運河を通り過ぎていたというナンガルハール州知事のシャフムード・ミアケルは、ランセットに、「車の中で、皆、毎日、中村の業績を称賛していた。これらの運河は永遠に残り、彼は記憶され続ける」と伝えた。中村が不明の襲撃者に襲われたのは、ナンガルハール州の首都ジャララバードの仕事場に向かっていたときだ。5人のアフガニスタン人も同時に殺された。

九州大学教授高等研究所教授でもあった中村は、2003年のラモン・マグサイサイ賞、2016年の旭日双光章受章などを多数の榮譽を受ける。2019年には、その貢献が認められ、また、同国で引き続き働くことが容易であるようにと、アシュラフ・ガニ大統領は、名誉国民賞を授与した。「彼はとても優しく、とても物静かで、とても謙虚で、そして非常に控えめでえした。」「それでいて、信じられないほどの成果を成し遂げたこと、とても印象的です。」と喜多はいう。

ご遺族は、妻の尚子と、娘の秋子、美智、幸と息子の健である。

Andrew Green